

社会科学研究所 定例研究会 報告要旨

2007年9月22日(金) 定例研究会報告

テーマ: 「ケインズ『一般理論』と不況動学-

『不況のメカニズム』(中公新書)をめぐって」

報告者: 小野善康(大阪大学社会経済研究所教授)

コメンテーター: 平井俊顕(上智大学教授)

野口 旭(本学経済学部教授)

時間: 15:00~18:00

場所: 専修大学神田校舎7号館(大学院棟)6階764教室

出席人数: 29名

報告内容概略:

報告者の近著『不況のメカニズム-ケインズ「一般理論」から新たな「不況動学」へ』(中公新書)をめぐって、活発な討論が行われた。まず、報告者の小野氏より、同書執筆の動機と、小野氏によるケインズ『一般理論』の評価、さらに小野氏による不況理論、いわゆる「小野理論」の基本的特質が報告された。次にコメンターの一人である野口より、同書におけるマクロ経済学の現状把握の問題点と、小野理論における「流動性の罍」の性質を中心に、コメントがなされた。さらに、もう一人のコメンターである平井氏により、同書におけるケインズ解釈の特質を中心に、いくつかのコメントがなされた。その後、両コメントに対する小野氏によるリジョインダーと、出席者全体での討論が行われた。全体討論においては、とりわけ、小野氏による乗数理論批判と、小野理論における流動性の罍と物価上昇率の位置付けをめぐって、活発な議論が行われた。

日本を代表するケインジアンであり、小野理論とも呼ばれる独自の不況理論の提唱者である小野氏の報告研究会だけに、学内はもとより多数の学外研究者の参加を得ることができた。小野氏の主張をめぐって、今後も多方面にわたる論争が期待される。

記: 専修大学経済学部・野口旭

2007年10月16日(火) 定例研究会報告

テーマ： 中国の「新階層(テクノクラート、富裕層)」について

報告者： 柴田弘捷

時間： 16:30~18:30

場所： 社会科学研究所会議室

参加者数： 26名

報告内容概略：

1 中国の社会階層と格差

1990年以降の「高度経済成長」の過程で、産業構成では第3次産業の比率が、職業構成では専門技術者の比率が上昇している。所得格差が拡大している。

改革開放前には、階級・階層構成は「二つの階級(労働者階級、農民階級)・一つの階層(知識人階層)」にとらえられてきたが、改革開放以降、職業を基礎とする階層分化が生じている。中国社会科学院は2000年に「十大階層・五大階級」の区分に基づく社会階層調査研究を実施したが、この区分が官許階層構成になっている。

2 「新しい階層」・テクノクラートの出現と主張

民間企業の創業者と技術者、外資企業の管理的技術者、個人経営者、私営企業家、専門職がテクノクラート、社会的・政治的一勢力・集団として出現している。

3 「富裕層」その出現

改革開放、「先豊論」市場経済の中で「富裕層」が出現しているが、その明確な基準はない。テクノクラートと「富裕層」の職業的地位は共通している。

記：専修大学経済学部・町田俊彦